女人の京

女人の京

岡部伊都子

新潮社版

女人の京

昭和四十五年四月二十五日　発行
昭和四十五年八月二十日　三刷

定価　五〇〇円

著者　岡部伊都子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(03)三二六〇一一一一
振替東京八〇八番

乱丁・落丁のものはお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・大口製本所
© by Ituko Okabe 1970 Printed in Japan

女人の京・目次

やまとの女人

善信尼……二
橘大郎女……一八
皇極天皇……二五
持統天皇……三三
大伯皇女……三九
元明天皇……四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

橘三千代……五五
吉備内親王……六三
貧しき女王……七一
入水の采女……七九
称徳天皇……八七
井上内親王……九四

女人の京

高野新笠陵……一〇五
白川・金色院跡……一一三
法金剛院……一二〇
鳥羽の恋塚……一二八
安楽寺……一三六
千本釈迦堂……一四三

宝鏡寺……一五〇
淀城跡……一五七
島原……一六四
泉涌寺……一七一
真葛原……一七九
神光院……一八七
あとがき……一九五

装幀写真
浄瑠璃寺・三重塔初重扉絵　土門拳撮影
本文写真　筆者撮影

女人の京

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

やまとの女人

善信尼

「もちろん、そのあとはもう、何もないのですが……」

蘇我馬子の墓ではないかといわれている巨大な古墳、石舞台のあたりからみえる小高い丘の中腹の集落。それが、司馬達等が草堂をかまえて仏像を安置していた坂田原であるという。清らかな秋の陽が、前日の夕方にひと雨あった飛鳥路に輝いていた。道ばたにも原っぱにも、みているだけで、さやさやと心を風の鳴らせるような、白いすすきの穂がなびいている。

六世紀の中頃、仏教は百済の聖明王からの献上として、欽明朝に伝達されたと『日本書紀』は語っている。

釈迦仏の金銅像一軀・幡蓋若干・経論若干巻。

きらきらと金色に照る仏像をはじめてみた欽明帝は〝歓喜び踊躍り〟目のさめるような異国文化に感動した。しかし、その感動を、すぐに、国家的な仏教受容の決定とすることはできなかった。国神の神祇を扱う物部尾輿、中臣鎌子の反対に逢った。仏像は崇仏支持の蘇我稲目が

もらって安置した。向原の家を浄めて寺とし、仏法や行を学んだ。

ところが疫病の流行である。物部、中臣はそれを蕃神のせいだとする。そして天皇に奏して、仏像を難波の堀江に流して棄てる。寺も焼く。まだまだ、新しい美神は、うす気味の悪い存在であった。

『飛鳥朝』(北山茂夫著)に「わたくしは、かねてから、聖明王による仏教の公伝なるものは、欽明朝の外交にタッチした大臣稲目の方から非公式に百済の聖明王に、その件について申し入れ、それに応じての事態ではないかと臆測している」とあるのを読んでなるほどと思った。

渡ってきた仏教が、欽明、敏達、用明、崇峻と、何代かの肯定否定の揺れをつづけながら、推古帝と聖徳太子の時代、国教化することができたのは、蘇我稲目—馬子の強大な支持の背景に渡来集団があったからだ。そしてその受容の基盤には、すでに私的信仰として故郷の仏教を抱く渡来の人びとの生活と文化がひろく深く存在したためだとは、思っていた。司馬達等のように、仏教の公伝以前に仏像をまつっていた人もある。司馬達等は記録にのこる有名人、実力者であったわけだが、数多い仏教者がすぐれた技術や学問の文化を支えていたのだ。

だが、受容の地盤は察していても、公伝を稲目からの示唆で行われたものとまでは、想像していなかった。けれどなるほど、このように考えられないことはない。すでに蘇我家の仏教支持の姿勢は、確とした強固なものである。その文明度の高さに「仏教受容こそ開発の道」との

信念を持っていたのであろう。

かつて、宣化帝の〝檜隈廬入野宮〟の跡が檜隈寺となったと伝えられ、その跡が現在、於美阿志神社になっている。『日本書紀』の応神期に名の記されている阿知使主が祭神である。呉から得た縫工女をはじめ帰化漢人が定住して、飛鳥朝の工芸文化の花を咲かせた中心地だという。いつか、秋祭りの日に宮司さんとであったら「このあたりは今来の郡と申しまして」といわれた。

歴史に記されない太古からこのころまでに、大陸や半島から渡来して住みついた人びとは数多いはずだ。歴史が記すようになってから渡来した人びとは、さらに新しい文化の伝達者であった。宣化帝がここに宮居を定めたのは、よほど、この地との縁が深かったのであろう。凝灰岩の、すこし北に歪んだむっくりした味わいの石塔が建っているが、あたり一帯には大きな礎石がいくつものこっている。

日本で、最初に尼僧となったのは、司馬達等の女である。幼いときから、信心深い父の教えのもとにあって、会得の早い利発な児であったのだろう、出家してその名の嶋を善信尼としたのは、十一歳と記されている。敏達帝は仏教にあまり関心がなかったようだが、その十三年、百済から弥勒の石像と仏像が来た。馬子は、高麗の恵便を師にして、善信尼を出家させたのだ。

後世の尼僧は、苦悩のあげくの出家であったり、極楽浄土への帰依であったり、また、信仰

とは関係のない他の事情による出家がある。だが、この最初の尼は、明治開国によってアメリカに留学した少女たちと同じくもっともモダンな、インテリ中のインテリであったわけだ。

善信尼の弟子として、漢人夜菩の女である豊女を禅蔵尼、錦織壺の女である石女を恵善尼、この二人も出家させた。ういういしい、三人の選ばれたる娘たちは、賢そうに目を輝かせながら、仏典を読み、師の解釈にうなずいていたことだろう。馬子はこの三人の尼を崇敬し、大切にした。尊い人材だったのだ。

馬子が、知識として尊崇していた仏法に、心からの帰依をしたのは弥勒石像の前での大会からしい。食事をしたあとの器に、達等は舎利を得た。馬子が舎利をかなてこの上において鉄鎚をふるったが、舎利はくだけず、かえって鉄の鎚や台がとんでしまった。そこで舎利を水に投げこんだけれど、舎利がこちらの思うように浮んだり沈んだりする。このふしぎに逢って、馬子、達等、そしてやはり仏法支持の池辺直氷田たちは、真の信心にはいって修行したという。

だが、また疫病である。科学的に病気をどうすることもできない時代の伝染病は、どんなに悲惨なものであったろうか。貧しさに飢えて道に死ぬ人があふれても、ただ、うめき泣き痛むほか、手のほどこしようがなかったのだ。

物部守屋と中臣勝海は敏達帝に「どうして自分たちの言うことをきかないで、蘇我の信仰を許しているのか、こんなに疫病で苦しむのは、そのせいではないか」と訴える。とうとう、帝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com